

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（c）

研究期間：2007～2009

課題番号：19500576

研究課題名（和文）思春期・青年期の性行動活発化の影響因子の解明と性の学力形成に関する実証的研究

研究課題名（英文）The study about activation for sexual behavior of the youth and training of the learning ability on sexuality.

研究代表者

数見 隆生 (KAZUMI TAKAO)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：30006465

研究成果の概要（和文）：思春期・青年期の性意識・性行動の実態とその背景・課題を明らかにするために、日本の高校生、大学生（合計約 3,000 人）に対するアンケート調査と高校の養護教諭に対するアンケート調査（約 300 人）及び取材調査（22 名）を行った。以上の結果、① 高校生のキス・性交体験率は、男 50.5%と 25.3%、女 55.4%と 27.0%で大学生は、男 78.9%と 64.9%、女 72.1%と 50.6%であり、高校生は女子が、大学生は男子が割合が高かった。② 高校の養護教諭は、事項の高校生の性行動に約 85%の者がリスクを抱えており、その主な理由には、許容的態度、人間関係の軽さ、自尊感情の低さ、性情報からの影響、寂しさや孤独、性知識のなさ、を指摘した。③ 早期からの性経験に影響している因子としては、携帯電話の利用の仕方、性情報の影響、日常生活の質や将来展望の欠如があげられる。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to clarify present stats and the factors of sexual awareness and behavior of Japanese youth. The survey was conduct on about 3,000 high school students and university students, and about 300 school-nurses in high school in May ~ September 2008. The main results were as follows:

- 1) The experience rate of kiss and sexual intercourse in high school students were boys 50.5 and 25.3%, girls 55.4% and 27.0%. The experience rate of kiss and sexual intercourse in university students were males 78.9% and 64.9%, femals 72.1% and 50.6%.
- 2) About 85% in 302 Japanese school-nurses were anxious to sexual awareness and behavior of own high school students. The main reasons were permissive behavior, rash relationship, low self esteem, no care to sexual media, loneliness in my life and lack of correct sexual information, etc.
- 3) The main risk factors on sexual behavior of youth were how to use of mobile phone, interaction of sexual mass media, own lack of QOL and prospect.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、応用健康科学

キーワード：思春期・青年期、性意識・性行動、性行動活発化因子、性の学力形成と実践

1. 研究開始当初の背景

日本の若者の性意識・性行動の活発化とそれに伴う望まない妊娠や性感染症の問題がクローズ・アップされているものの、その実態と背景・要因は必ずしも明確ではなく、そのため、中学・高校そして大学等でも十分な性教育はなされていない状況にある。

2. 研究の目的

上記のような背景の中で、日本の思春期・青年期の若者の性意識・性行動の実態とそれに影響を及ぼしている因子を解明すべく、当人はもとより、彼らを支援している高校の養護教諭に対する実証的な調査を実施し、検討を行うことにある。またそれと平行して、こうした現状に対応するために、どのような性の学力形成を図る必要があるか、その考え方（スタンス）とカリキュラムを考案し、具体的な性の教育を実践的に実施しつつ、そのあり方を検討・提案することにある。

3. 研究の方法

上記の研究目的を明らかにするため、以下の方法で実施し、検討を行った。

①宮城県にある5つの高校の生徒に対する性意識・性行動とその背後にある影響因子に関するアンケート調査の実施し、1296名から回答を得た。

②宮城県と他の2県にある教育大学2校、私立の一般大学5校の7大学の学生に対するアンケート調査の実施し、1664名から回答を得た。

③中国・北京市内にある2高校、4大学（一般大学2、師範大学2）に対し、北京大学医学部社会医学研究室の協力のもと、日本で行ったアンケートと同一調査を実施し、高校生719名、大学生1601名から回答を得た。

④日本の5都府県にある高校の養護教諭637名に生徒の性意識・性行動と性教育の実態に関するアンケート調査用紙を配布し、302名から回答を得た。

⑤宮城県内の全高校（86校）における養護教諭と保健体育教師に対して性教育の実状とその困難さや課題、及び今日の生徒の実態に対応する性教育のスタンス、内容、あり方等に関する調査を実施し、それぞれ78名と65名から回答を得た。

⑥5都府県で高校の性教育に課題意識をもって取り組んでいる養護教諭に、生徒の実態と性教育の実状についてそれぞれ約1～2時間のインタビュー調査を実施した。

⑦高校生に対する性教育のスタンスとコア・カリキュラムを考案し、それに基づく実

践から「性の学力」形成のあり方を検討した。

⑧宮城教育大学で教員を志望する学生に実施してきた16年間の「人間と性」の授業について、学生に書かせた授業後のコメントを中心に分析を行い、その内容とあり方の原則を検討した。

4. 研究成果

1) 5都府県の高校養護教諭302名のアンケート調査結果によると、自校の生徒の性意識・性行動に対して、リスクや心配を「かなり感じる」としたのは39.1%、「多少感じる」としたのは46.7%、「あまり感じない」としたのは13.2%であった（図1）。

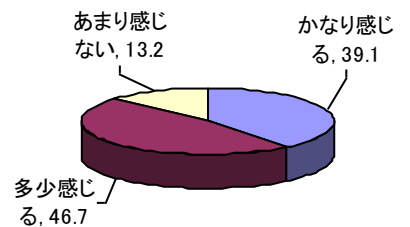


図1 養護教諭が自校生徒の性行動に抱くリスク感(302名)

その「リスクを感じる理由は何か（複数回答）」を尋ねた問いでは、「性行動に許容的な感覚がある」（69%）、「人間関係の軽さ」（67%）、「自尊・自己肯定感が低い」（56%）、「周りの性情報に影響されやすい」（51%）、「居場所なく孤独・寂しさがある」（49%）、「性に関する知識が乏しい」（47%）、「将来設計力や夢の乏しさ」（35%）、「自分の意思を主張できない」（32%）であった。

2) 高校1～3年生1264名（男524・女740）に対する調査結果では、次のような主だったことが分かった。

①高校生がセックスして良いとした条件は、「合意があれば」が男子58.5%、女子48.8%、「愛があれば」が男子28.9%、女子36.7%で、「結婚すれば」と「婚約していれば」は、それぞれ男子6.5%と3.1%、女子7.1%と3.2%であった。

②「キスの経験」に関しては、「経験あり」が男子50.5%、女子55.4%で、「性交の経験」では男子25.3%、女子27.8%であった（図2及び図3）。

③性交経験者に、初交までの期間を聞いたところ、「1ヶ月以内」に経験した割合は男子45.8%、女子56.3%と半数近くを占めており、性行動の早期化が伺えた。

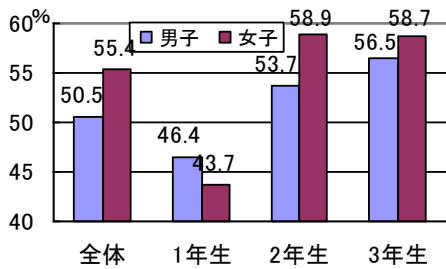


図2 学年別でのキスの経験率

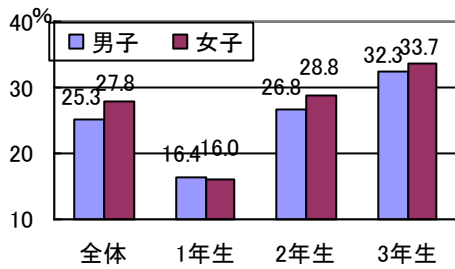


図3 学年別での性交の経験率

④性行動に影響する因子としては、性に関するイメージや許容的な意識状況、メディアからの性情報、といったことが影響している傾向が伺われた。

3) 大学生の1～2年生1664名(男777・女887)への調査結果からは、次のような主だったことが分かった。

①キス経験率では男子78.9%、女子72.1%、また性交経験率では男子64.9%、女子50.6%と、共に男子学生の方が高いことが分かった。

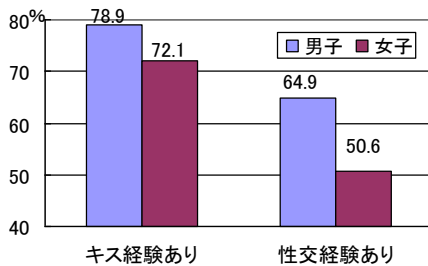


図4 キス経験と性交経験

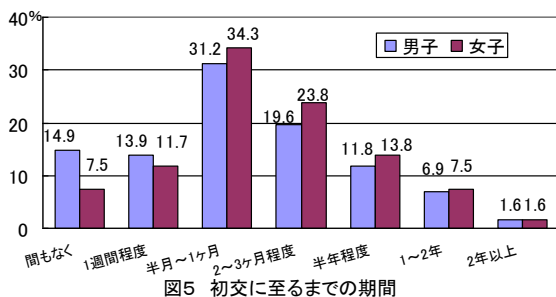


図5 初交に至るまでの期間

②男女共に初交経験者の半分以上(男子60.0%、女子53.5%)が知り合って一ヶ月以内に性交に至っていることが分かった。

③初交の性交動機では、「相手のことが好きだったので」が男子73.4%、女子75.3%と大半であり、互いに「好き」な関係になると、たいがい性行為に結びつく状況が伺えた。

④今日の大学生の避妊実行率は、男子87.4%、女子91.2%と共に非常に高い割合であり、性交時における一定の慎重姿勢や意識は持っていることが確認された。

⑤大学生の性行動には、それまでの親の子育て観(厳格型・放任型はマイナスに作用)、メディアの影響、自尊感情や将来への夢、といったことが関与していることが伺えた。

4) 高校の養護教諭に対するインタビュー調査では、今日の学校格差と生徒の性的実態、性教育の実施状況に大きな関係があることが伺えた。すなわち、「底辺校」と「進学校」といわれる格差の背景には、家庭や地域の経済格差、将来展望、生き方、自己肯定観の違いとなり、それが性意識や性行動に結びついている傾向が伺われた。

5) 高校における性教育の実態調査では、教科書にある程度のことは一応扱われている傾向が伺えたが、学校として生徒の実態に見合って独自のカリキュラムを作って性教育を行っている状況は、ほとんど見られなかった。性教育のなかなか実践しにくい状況の理由としては、「指導内容がよくわからない」ことや「時間確保がむづかしい」ことが多くあげられた。また、望ましい性教育のスタンスとしては、「高校生にも性行動はあることを前提に、慎重行動を促す内実ある性教育をすべき」と包括的な扱いに対する意見が大半を占めた。

6) 中国の高校生・大学生の比較調査では、両国の文化の違いや規範意識の違いも顕著にあり、性交の経験率では大きな差が見られた。それに対し、高校生では、日本(男26.6%・女27.7%)・中国(男8.2%・女4.6%)であり、大学生では、日本(男68.4%・女54.0%)・中国(男21.4%・女7.5%)であった。その背景には、親の子育て観、メディアの情報の接触に大きな違いが見られた。

7) 高校と教員養成大学における性教育の実践的研究では、性感染症や望まない妊娠の予防という保健的観点だけではなく、人間の関係性を中心とする生き方に結びつく内容や男子に学ばせる内容(教材)のカリキュラム化とその実践が重要であり、そのことを具体的実践による学習者の反応の事実により実証しようとした。その実践的な成果についてはここでは省略する(取り組みの事実とその成果に関する具体については、後述の図書を参照されたい)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①数見隆生、土井豊、伊藤常久「高校生の性意識・性行動とその背景に関する調査研究」
公衆衛生みやぎ No391 2008年10月
査読無

②数見隆生「宮城県内の高校における性と性教育の状況～養護教諭と保健体育教師への調査から～」
公衆衛生みやぎ No388 2008年8月 査読無

[学会発表] (計 12 件)

①数見隆生「高校生の性意識・性行動の実態とその背景の多様化～養護教諭へのインタビュー調査から」
第56回日本学校保健学会 2009・11・28 沖縄県立看護大学

②伊藤常久「高校生の性意識・性行動とその影響要因に関する研究」
第56回日本学校保健学会 2009・11・28 沖縄県立看護大学

③土井豊「高校生と大学生の性意識・性行動の実態及びその関連要因についての比較検討」
第56回日本学校保健学会 2009・11・28 沖縄県立看護大学

④数見隆生「高校生の性に関する諸調査から見えてきた性をめぐる貧困と課題」
第57回東北学校保健学会シンポジウム 2009・9・5 福島大学

⑤数見隆生「教育大学生の性意識・性行動をめぐり課題の検討」
第28回日本思春期学会 2009・8・28 静岡(アクトシティ浜松)

⑥土井豊「男女大学生の性意識・性行動の実態、及び背景要因に関する検討～その1・男女差を中心に」
第28回日本思春期学会 2009・8・28 静岡(アクトシティ浜松)

⑦伊藤常久「男女大学生の性意識・性行動の実態、及び背景要因に関する検討～その2・性交経験の有無及びその慎重行動との関連要因の検討」
第28回日本思春期学会 2009・8・28 静岡(アクトシティ浜松)

⑧伊藤常久「Relationships between Experiences of Sexual Intercourse and Psychosocial Factors of University Students Japan」
第1回アジア・太平洋ヘルスプロモーション・健康教育学会 2009・7・20 千葉(幕張メッセ)

⑨土井豊「養護教諭が把握している高校生の性意識・性行動の実態とその背景に関する調査研究」
第55回日本学校保健学会 2008・11・15 愛知学院大学

⑩数見隆生「高校における性教育の実状と今求められる性教育スタンスに関する養護教諭への調査研究」
第55回日本学校保健学会 2008・11・15 愛知学院大学

⑪土井豊「大学生の性意識・性行動に影響を及ぼす心理・社会的要因等に関する調査研究」
第56回東北学校保健学会 2008・9・13 宮城教育大学

⑫数見隆生「高校における性教育の実施状況と今後のスタンスに関する意識」
第27回日本思春期学会 2008・8・30 千葉(京葉銀行文化プラザ)

[図書] (計 1 件)

数見隆生編著 かもがわ出版

2010年7月末刊行予定(現在印刷中)

タイトル「10代の性の実態と性の学力形成」
総ページ230ページ

[その他]

数見隆生、研究成果報告書

「現代の思春期・青年期の性をめぐる現状と課題～今日の社会で確かな性の学力を育むために～」
2010年3月

A4版 171ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

数見 隆生 (KAZUMI TAKAO)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 30006465

(2) 研究分担者

土井 豊 (DOI YUTAKA)

東北生活文化大学・家政学科・教授

研究者番号: 80197996

(H19→20 連携研究者)

(3) 連携研究者

伊藤 常久 (ITO TSUNEHISA)

東北生活文化大学短期大学部・生活文化学科・講師

研究者番号: 10289738

(4) 研究協力者

村口 喜代 (MURAGUTI KIYO)

村口女性クリニック・院長(医師)